

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、法龍程の仕合せ者が外にいるだろうか。よい両親を持ちよい家庭を持ちよい子供を持つて物質に恵まれ過ぎて何一つとして不足がない。此身に育て上げて下さる迄には三世の諸仏を泣かせ、八千遍の苦勞さし、永劫の御骨折りを掛けた事だろう。遠く宿縁を慶ばずにはいられない。この父を持ち、あの母を持ち、仏道に入らして頂き必死の勉強をさして頂き、発表も出来、表現も出来る。何と幸福なこの身だろう。三千世界を探しても二人といたないこの身、尊いではないか、感謝せずにはいられない。怠慢は許されないぞ、墮落は出来ないぞ。

法龍には人の知らない使命が有る。人の真似の出来ない役目がある。

七百年の古に祖師聖人は当時の教会の紊乱墮落を慨いて、これならば釈尊の精神に悖るではないか、これでは弥陀の本願に背くではないかと、批難攻撃の中に破邪の利剣を振るわれ
たではないか。 信の巻には

然るに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の真証を貶す、定散の自心に迷
うて金剛の真心に昏し。 乃至 誠に仏恩の深重なるを念じて人倫の弄言を恥じず、浄邦を
忻ふ徒衆、穢域を厭ふ庶類、取捨を加ふと雖も毀謗を生ずること莫れとなり と、化土巻に
は、

然るに濁世の群萌、穢悪の含識、乃至 九十五種の邪道を出でて半満権実の法門に入ると
雖も、真なる者は甚だ以て難く、実なる者は甚だ以て稀なり、偽なる者は甚だ以て多く、虚

なる者は甚だ以て滋し。と

又、化土卷の終りに

竊に以みれば聖道の諸教は行証久しく廃れ浄土の真宗は証道今旺なり。然るに諸寺の

釈門教に昏くして真仮の門戸をしらず、洛都の儒林、行に迷ふて邪正の道路を辨ふることなし。

何と大胆不敵な暴言だろう。八家九宗の聖道門や、定散の自心に迷う浄土門の人達をぼろ糞に攻撃しているのは邪見ではないか。真仮の門戸を知らず、邪正の道路を辨うることな

し、皆偽虚なる者であつて 自分一人が真実の信仰であるとは何たる僥慢だろう。真宗門内の学者蓮は弁護して、あれは破邪顕正だと美しい名目を立てているが、それは

我田引水だ。聖人以外の者から見れば肉食妻帯をした墮落坊主よ、師匠に背いた横着坊主よ

と排斥され、法然門下の十人の異安心の中の信一念の邪義の親玉であったのだ。而しそれが真実であったから今光彩を發揮したのだ。

処が七百年後の今日では、浄土真宗も型に囚われて実を失い、政策を弄して信を喪い、名利に走って徳を欠き、酒色に溺れて毒を吐く、伽藍仏教の末路を呈示しているではないか。必死に成って真宗を復興せしめようと努力する者を異安心と攻撃し 己は無安心の殻に隠れて安眠し、本堂の鬼瓦が落ちたと言っては門徒にかぶりつき、子供が生れたと言っては信徒の物を剥ぎとる。生きている人間は生かし切らないで、葬式や法事で下り向きで酒を飲む。死んだ者のお蔭で食うて行くのだから 社会から捨てらるるのも当然ではないか。自ら法衣を脱いで腰弁で重労働やっているのが無安心の親玉だ。まだ昔の夢を捨てやらず真宗門徒と威張っているが、新興宗教に押しまくられて青息吐息が判らないのか。真宗随一の地方でさえそれだもの、全国は推して知るべしだ。

「真なる者は甚だ以て難く、実なる者は甚だ以て稀なり、偽なる者は甚だ以て多く虚なる者は甚だ以て滋し」やるぞ、やるぞ、法龍は最後の一人に成っても真宗の真宗たる唯信独達の法門を發揮して見せるぞ。本願寺を復興して見せるぞ。

27

唯説弥陀本願海

—略—

若い求道者よ!! 法龍が血汐の跡を残して置くから 正法を傳持しなければならぬぞ。

八万の法蔵は唯説弥陀本願海に納まるのだ。唯名号六字に歸するのだ。

釈尊が証を開いて自内証を説法されたのが華嚴經、文殊、普賢の二菩薩は聞いたが、其他の聖衆は唾の如く聾の如しであったから、程度を低めて阿含經、方等經、般若經と四十

余年間根機を整えて、今自力の出世本懐たる法華經を説く真最中に王舎城の悲劇により韋提希夫人の請を入れて、王宮に降臨して觀無量壽經を説かれ、靈鷲山に歸りて法華經の残りを説かれたから 法華と念仏は同時の經と言うのだ。最後に涅槃の都に入らるる時に涅槃經を説かれたのである。

華嚴と法華と涅槃とは自力の三大經であり、他力の三部經に合すれば 大經、觀經、小經と一致するのである。

華嚴經と涅槃經は法華一乘の經に撰して自力の出世本懐の經とするけれども、それは月待つまでの手ずさみであり、根機が熟すれば岸上に戯れる子供より、水中に溺れている子供を救う、仏の慈悲を顕して觀經を説き、小經に入り、遂に大經に歸して 自力の出世本懐は遂に他力の出世本懐に歸するのである。これを唯説弥陀本願海と教えられたのである。而し私は独特の味を以て教化したいと思う。

釈尊一代の仏教を 法の側から言えは八万の法蔵、この内容を縮刷すれば六度万行。

布施とは慳貪の反対で 布施とは財施、法施、無畏施、物に対し人に對し親切でな

ければならない。 持戒とは 破戒の反対で身口意の三業を慎む。 五戒八戒十戒、二百五十

戒、具足戒などあつて自己の言行を慎む事である。 忍辱とは 瞋恚の反対で 人に對し物

に對し事に對し時に對し 総てに忍耐強く忍ぶ事である。

精進とは 懈怠に對し 表裏相応して自己の使命を果たし、終始一貫努力する事である。

禪定とは 散乱に對し心が静寂でなければ 正しき判断を失うから 反省する事である。

智慧とは 愚痴に對し仏智を諦得し、因果の道理を明かに見、修養せよと言う事である。

この六度万行は道德的の言葉に直して言えは 人に親切で言行一致で忍耐強く努力して

反省し修養する者に落伍者はいないのだ。それに 世の中の人は慳貪邪見で施を知らず、
言う事と行う事が反対で 一寸の事に怒りをなし 放縦な生活をして反省もなく修養もしない
者に成功する筈がないではないか。

この六度万行を更に定散二善に納むれば、定は息慮凝心で禅定が入り、散は廃悪修善で其
他の五徳が納まる。 更に定散二善は 念仏一行に歸し、遂に名号の独り働きとなる。

釈尊一代の仏教を 機の側から言えば、八万四千の法門を受けるのだから 機毎機毎で
あるけれども、法然上人は 選択集に八十一品と教え、観無量寿経では定散二善と九品を

説き、大経では三輩共に念仏を明かし、遂に第十八願に来たって 十方衆生一人残らず
逆謗の一機となり、一機一法の名号一法と逆謗一機が一体に成った処で、信機信法の二種深
信とも、絶対不二の法と絶対不二の機とが一つに成ったとも、撰取されたとも、開発したと

も言うのだ。 この境地、この極意は人間の知識や学者の判断や想像で伺い知る処ではな

い。不思議の仏智の作用く世界で、これを唯説弥陀本願海とも、八万の法蔵を読み破ったとも言うのである。我々の我執を調熟の光明で浄尽し、逆謗闡提の素地の儘が 摂取不捨の利益を蒙った無我の境地、全く他力廻向の賜物である。

28 三願転入

祖師聖人は化土巻に、十方衆生の入信の道程を三願転入を以て指示していらるる。

「愚禿釈の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化によりて、久しく万行諸善の仮門を出でて、永く双樹林下の往生を離る、善本徳本の真門に廻入して、ひとへに難思往生の心を発しき、しかるに今ことに方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり、すみやかに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲す、果遂の誓まことに由あるかな、ここに久しく願海

に入りて深く仏恩を知れり、至徳を報謝せんがために、真宗の簡要を撫うて恒常に不可思議の徳海を称念す。いよいよこれを喜愛し、ことにこれを頂戴するなり」と。

然るに浄土真宗に流れを汲む道俗は他力廻向の言葉に誤魔化されて実地の求道を忘れ、唯観念の遊戯に終つて、他力が無力に成っている。

私が総会所で布教している時、雲山和上が度々参詣されて、「大沼さんあんたの布教は

説教ではないね」「何ですか」「御示談だ、人の聞きたいと思う処を自分で

自問自答しているのだ」「そうですね」「時に大沼さん 私が本山で昨日説教した時、

今総会所で大沼が説教しているが、あれは腰を据えて聞かねば判らんぞ、第十八願を向うに

眺めて丸々他力の丸ごかしにしない、唯になるまで実地に求めよと、三願転入の腹で説教し

ているから、その積りで聞かないと味がとれないぞと、言つとききました」「有難う御座

います」法龍の腹は定散の自心に迷うて金剛の真心に昏い第二十願の法頓根漸の自惚道

俗ぞくに對たいして 真しん仮けの分ぶん際さいを明めい瞭りょうに説せつ示じしようとなどり努力よくしているのだ。 無む歸き命みやう安あん心じんに成なつてい

るのが可か愛あい相そうだから機き受じゆの信しん相そうを明あらかにして上あげるのだ。 死し後ごの往おう生じやうのみを夢ゆめ見みているから 現げん生しやう不ふ退たいの有あることを教おし上あげているのだ。 觀かん念ねんの遊ゆう戲ぎばかりしているから実じつ機きが流る転てんするぞと突ついて上あげるのだ。

三ぎ経きやう、七そ祖そ、祖そ師しの著ちよ述じゆつが 皆みな三さん願がん転てん入にゅうの意い味みで 真しん仮けの分ぶん際さいを鮮あやかに説といて有あるのに 頭あたまだけは第だい十じゅう八ぱち願がんの積つもりで自う惚ぬれているが、 腹はらは第だい二に十じゅう願がんの入いり口ぐちに立たつているのだ。

真しん仏ぶつ土ど卷まきに、「既すでに以もつて真しん仮け皆みな是これ大だい悲ひの願がん海かいに酬しゅう報ほうせり 乃至乃至 真しん仮けを知しらざるに由よつて 如に来らい広こう大だいの恩おん徳どくを迷めい失しつす」

和わ讚さんに

念ねん仏ぶつ成じやう仏ぶつこれ真しん宗しゆう

万まん行ぎやう諸しよ善ぜんこれ假け門もん

権実真仮をわかずして

自然の浄土をえぞしらぬ

この念仏成仏これ真宗の中に、死後に眺めた第二十願の念仏と、仏智満入で諦得した第十八願の念仏の有る事を知らないから 他力不思議の境地が受取れないのだ。仏智の仕組が方便より真実に誘引しようとしてあるのに、道俗は自惚れて、すんだ積りで堕ちて行くのだ。

僧侶よ、学問も必要だが実地の体験は猶必要だ。七里和上は学問は槍の柄、信仰は穂先と言っているが、私は学問は定規、信仰は剃刀と言う。布教使も左の凶面を諦得して同行がどの程度にいるかを注意して布教しなさいよ、効果が挙がるから。

三願

三経

三蔵

三門

三機

三往生

第十九願

観経

福德蔵

要門

邪定聚

双樹林下往生

第二十願

小經しょうぎょう

功德藏くどくぞう

真門しんもん

不定聚ふじょうじゆ

難思往生なんしおうじょう

第十八願

大經だいきょう

福智藏ふくちぞう

弘願ぐがん

正定聚しょうじょうじゆ

難思議往生なんしぎおうじょう

これを六三分別ふんべつと言いつて浄土真宗じょうどしんしゅうの綱格こうかくをなすものだ。実地じつちに求道きゅうどうして行く時とき

第十九願

要門ようもん

邪定聚じゃじょうじゆ

法ほうが自力じりき

機きが自力じりき（法機俱漸ほうきぐぜん）

雑行ぞうぎょう

修諸功德しゆしよくどく

至心ししん発願ほつがん

大衆たいしゅう圍繞ういによう

三不さんぷ— 因いん

第二十願

真門しんもん

— 不定聚ふじょうじゆ

化土けど往生おうじょう— 果か

法ほうが他た力りき

機きが自じ力りき (法ほう頓とん根こん漸ぜん)

雑ざつ修しゆ

植じき諸しよ徳とく本ほん

至し心しん廻え向こう

不ふ果か遂すい者しや

第十八願

信しん前ぜん

自じ力りきの心こころ (疑ぎ)

信しん後ご

一いち念ねんの信しん

弘ぐ願がん | 正しやう定じやう聚じゆ

法ほうが他た力りき

機きが他た力りき (法ほう機き俱く頓とん)

專せん修じゆ

三さん信しん | 因いん

乃ない至し十じゆ念ねん

至し心しん信しん樂ぎやう

若にやく不ふ生しやう者じや

報ほう土ど往おう生じやう | 果か

後の因に依って説明すれば第十九願の開設が觀無量壽經、これを善導大師は要門と教え、

要は肝要、要、八万の法蔵は 觀無量壽の觀の一字に納まる肝要、 門は通入の義で出入が

出来る、 門を出れば六度万行となり八万の法蔵となる、 門に入れば定散二善から念仏

一行に通ずるのである。

願文には法を修諸功德と説き、 機を至心発願と教え、 諸々の功德を拈ぐれば諸善万行とな

り、此の中に万行随一の念仏も納まる。この自力の善根を策励して至心に発願して往生を

願うから法機俱に自力であり、 漸進しか出来ないから 法機俱漸と言ひ、 利益としては大衆

に圍繞せらるるけれども、 聖人はこの桁の人達を邪見が去らないから邪定聚の機と教え、

修相は如実でないから、 結果としては 仏の入滅を見る双樹林下の化土往生を得るのであ

る。此の桁の人達は、 善根功德を修していると思つてゐるけれども、 浄土往生の資助に使う

から 之を第十八願から見て雑行を雑修していると思つてゐると選捨するのである。

(註) かなりの学者でも雑行雑修の事を 神道の祈り祈祷をしたり、御札や御籤などを

貰う事を雑行雑修と説明しているが、それは絶対に誤りである。あれらは神道の行事であつ

て当宗から彼是言うべき筋合いのものでない。雑行雑修とは当宗内の善根功德を踏み台に

して往生を願う物柄を雑行と言ひ、念佛修する修相について機執が去らないで、助正をなら

べて往生の助けにするのを 雑修と言ひのた。

合点で通つてはいけない。実際に修してみよ。弘法大師の所謂 「名利の為に千金を投出

すは鬚を撫でるよりも易く、慈悲の為に一銭投出すは生爪を抜くよりも難しい」の言葉の如

く、実際、名誉を得る為か、利益を得る為には 湯水のように使ひながら、慈悲の涙は注が

ない、善根を積まずに果報の来る筈がない。失敗だらけに気がついた時、自力の善根では

立派な証果は得られないと気がついた時、第二十願の門に入るのである。

第二十願の開設が阿弥陀経、この意味を善導大師は真門と教え、真は真実と続く字である

けれども まだ機執が去らないから 法の真実の真を取って 機の未熟を顕して実と言わな
いのだ。門は通入の義で要門より漸進して弘願に通入せしめようとの思召しから真門と言っ
ただ。

願文には法を植諸徳本と説き、機を至心廻向と教え、諸々の徳の根本を植える。 聖人

は善本徳本は弥陀の名号なりと仰せられてあるが、善本徳本の名号を修習しながら機功を募
るから折角の他力廻向の名号も至心に廻向する自力廻向の桁に墮ちるのである。

だから法は他力で、機は自力の法頓根漸であり、利益としては第十八願の境地まで果遂せ
しめずには置かない徳は有るけれども、修相のいかんによって往生の定不を決めようとして
いるから 不定聚の機と言い、結果としては難思往生の化土往生を得るのである。 第十九

願の邪定聚の機の双樹林下の往生に較ぶれば勝れているから難思の二字が与えてあるけれど
も、第十八願の正定聚の機の難思議往生に較ぶれば程度が低いから議の一字を欠くのであ

る。この桁の人達は万行超過の名号に眼は注いでいるけれども、前三後一の助業を以て往生の資助とするから名号特異の腕を發揮せず、雑修となり、又専修も桁を落として五専各修となり、機功を募るから僣慢となり、機執が捨たらないから自力の心と教えたのである。この自力の心の有る間は仏力に乗托していない、信順していないのだから疑いの心と言ったのである。

だから蓮師の「もろもろの雑行雑修自力の心を振り捨てて」と仰せられたのは、浄土門内の第十九、第二十の観小両経の桁を離れて第十八の大経に入れ、これ方便より真実に帰せしむる果遂の願功である。だから三願転入をしない者はいないのだ。自分は一度で第十八願に帰入したと思っっている者は僣慢の自惚れなのだ。

第十八願の開設が大無量寿経、これを善導大師は弘願と教え、十方衆生平等の証果を得るから弘い願と言われたのである。果遂の誓によって漸進した機類は仏智不思議によって

自力浄尽し、一念の信を諦得し信前信後の水際鮮やかに、ここに唯信独達の法門を發揮することが出来るのである。

願文には、第十九、第二十との行前信後なるに異なり信前行後である。機は至心信樂、己を忘れた他力の無我であり、法は乃至十念で他力廻向の名号が徹底して信海流出の称名となつたものである。法も他力、機も他力、法も本願名号正定業、機も決定往生の正定聚機法俱頓の絶対他力、これを一向専修の行者と言ひ、利益としては若不生者、報土往生疑いなし、これを難思議往生と言つたのだ。これを正信偈の道綽章には

三不三信誨慇懃

と言ひ、源信章には

専雜執心判淺深

報化二土正弁立

と仰せられてあるが、真宗の道俗よ、自惚れが強いのだ、他力が無力に成っているのだ。其の儘が我儘になり、唯が槍放しに成っているのだ。易い易いで誤魔化されなさんな。合点なら易いが実地となれば難しい。而し苦抜けした後は易いと言う言葉までいらぬ易さだ。

真宗の人々よ 根本から間違っていないか、基礎に狂いが有るから、完成しないのだ。聖道門は易信難行であり、浄土門は難信易行が宗の据わりだ。難信難行の宗旨もなければ易信易行の教えもないのだ。

君達は聖人様の御苦労の話聞いて 法を死後に眺めているのだから糠喜びだ。観念の遊戯に終って生活とは何等交渉を持たないのだ。表看板は立派に真俗二諦、現当二世なんて掲げているけれども、真諦門が徹底していないから俗諦門がわやだ。此世はどうもなれな

いのだ、死にさえすれば五十二段なぞと、とぼけるな、因果が矛盾している。現当二世にならないではないか。

真諦門とは精神的の満足であり、俗諦門とは肉体的の活動である。精神を離れて肉体がなく、肉体を離れて精神がない。信仰を離れた生活もなく、生活を離れた信仰もない。清く正しく進め。宿業宿業と言つてずるけてはならないぞ。

今日のこの日は再び来ないのだ。人生受生の甲斐が有ったか。世間の人様の御恩に報いたか。そんなすさんだ生活で仏様に申訳が有るか。

十方法界我物なり。感謝の言葉も南無阿弥陀仏。懺悔の言葉も南無阿弥陀仏。